

平成24年9月5日発行(毎月5日1回発行)
第52巻9月号(通巻638号)

風土



9

原爆忌
神蔵器

戒名に俗名一字雲の峰

林美美子

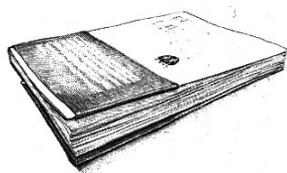
羅や四の坂ひとり登りつめ

歌麿の墓に影おく赤のまま

てのひらをにぎれば拳原爆忌

大夕焼消えなば何をもたらずや

端居してをれば激励容赦なく
泪目をなほす目葉涼しかり
黙禱す原爆六十七年忌
水飲んで己けぶらす夏旺ん
光秀の念仏講や百日紅
魂おくる蟬の寄る木と寄らぬ木と
金粉を降らす月光盆の過ぐ



竹間集

同人作品



六月

代田 青鳥

青青と六月のきて誕生日
六月や「水」と題して写真展
義理堅く動く時計や梅雨しとど
遠雷や兄の『疎開記』読み返す
口中に飴ころがしてサングラス
遠雷や体温計を隠し持つ
合歓咲いて寝釈迦はうつらうつらがな

緑さす

田中佐知子

開帳の釈迦の白毫緑さす
秘仏堂出できて露の浮葉かな
水音の涼し四阿「有楽」かな
女工哀史の村や丈なす夏蓬
遠雷や海の生簀の揺らぎぬて
置杖を戻して滝をあとにせり
青草や仔山羊らに沖見えてをり

恋ぼたる

工藤ミネ子

巢に顎ののれり俯瞰のつばめ子ら
寄せ植糸の櫛の芽吹く市の中
日当りて市の中なる浦島草
苗市や贖ふ人も腰老いて
野良ねこに海の展ける昼寝場所
はにかみの色ぎしぎしに暇かな
恋ぼたる星に紛れてしまひけり

夏帽子

柴田久子

外に出でわが家眺むる青簾
登りきるで虫造幣局の塀
現役の八十路の夫の夏帽子
太陽の匂ふ少女ら西瓜喰む
窓開けてバスのふくらむ青田風
五体まだ動くよろこび胡瓜もむ
きのふより天体ショー待つかたつむり

熱気球

中村洋子

めまとひの柱を立てて来つつあり
月光をこぼさぬやうに花棟
本館の奥に喫茶の夏のれん
妃殿下の平らな鏝の夏帽子
夏帽子聖母のやうに嬰抱く
朝焼けのカップドキアの熱気球
短夜のオリエント急行終着駅

夏燕

橋添やよひ

老鶯や坂立てかけて三室戸寺
浮舟の碑に青萩の雨しづく
傘をもつモネの女の夏帽子
芭蕉句碑に会ひ得て涼し札所寺
夏つばめ水郷つなぐ近江かな
吉野杉匂ふ工房青あらし
麻のれん「一」の掠れに風みえて

闊歩せり

南うみを

無農葉棚田赤腹闊歩せり
新じやがの小粒や蒸して味噌つけて
在五忌をきのふに蚤狩りにけり
草いきれ尽きたる闇が在五の墓
黒板に「鮎築掃除午前四時」
かつとりの鮎濃く匂ふ土用かな
雨脚の鮎築の簀を抜きにけり

濤しぶき

橋添やよひ

鑑真の忌日魁夷の濤しぶき
雨音の御廟泰山木一花
きささげの花の中なる天平仏
経蔵は校倉造り梅雨ふかき
凌霄の花の唐招提寺みち
「山貳番籤」引く知らせ鱧づくし
牡丹鱧源平鱧や灯の入りて
夏雲や「太平の舞」ゆるやかに
八一歌碑蓮の夕影風の出で
天の川比叡の奥に虚子の塔

叡天神山

長刀鉾

山河集

同人作品



神蔵器選

深く挿し学校田の早苗札 浅田 光代

入梅や血をさらさらにするくすり
七月の文楽心中ものかかる
けふの日がいちばん若し栗の花
椿の樹から本堂へ蜘蛛の糸

近藤幸三郎

百人の僧の庭掃く涼しさよ
まんまるの志功の眼鏡雲の峰
揚羽舞ふ金の眸の獅子頭
心臓に電氣を通す麦の秋
枇杷は黄の荒れて二日の島泊り

林 いづみ

やうやくに叶ふ墓参や梅雨の蝶
あめんぼの知らぬ水底凸凹す
青山椒「鶴」七月号届きけり

一木の緑陰ごとの木のベンチ
六十本深紅の薔薇を贈りけり

スカイツリー

第一展望台より上梅雨に入る
夏帽子脱ぎて座席を譲らるる
薫風や汽車山を縫ひ川に沿ふ
樋に穴一か所ありて大雷雨
目高の子増えて大雨上りけり

根岸善行

山蟻のみちの曲がりし栗の花
水口を外して伏せし余り苗
畔草も刈り終へ父の忌の間近
田と畑と青葉の中の石舞台
抜き放つ雪溪と言ふ鈍き太刀

上辻 蒼人

◇特別作品◇(抄)

二重らせん

池田加代子

若布寄すわだつみに命生れけり
美しき二重らせんの初明り
一つ二つ四つ八つ十六芽吹きかな
生き物の生くる限りの猫の恋
牡丹咲き蜂の陶醉花の陶醉
高らかに縄張り宣言囀れり
ニツポニアニツポンの雛巢立ちけり
夕べには命燃やして恋蚩
生命探查衛星が行く冬銀河
ただ一度恵まれし命去年今年

風土独語／神蔵器



掌の珠を割るごと朴開く

柿沼 盟子

掲出句は下から仰ぎ見ているのではなく、作者がしばしば訪れているという六義園の回遊式公園、園内では一番高い築山の藤代峠あたりから眺めたたった一本の朴の花か、それとも何処か旅行中の宿の前の川を隔てた対岸の朴の花を見ていたのであろうか。

朴の花は茅舎の「朴散華即ちしれぬ行方かな」など、花の散る方をモチーフにしているものは多く見られるが、朴の花そのものの咲く一瞬を詠ったものは初めてであろう。

一つの朴の大きな蕾が、あたかもてのひらの珠のごとく、ぽんとかすかな音まで聞こえたかのように四方に割れ、真白い九片の花片となって開く。それは、まことに美しく、神々しいまでに崇高で気品がある。朴の花の新しい句が生まれた。

さらさらと心の中の蟻地獄

杉本葉王子

人は誰でも心の底に、一つの蟻地獄を持っているのではないか。そう思ったとき、俺はまんまと薬王子の仕掛けた蟻地獄にはまり落ち込んでしまったようだ。

蟻地獄については地獄に落ちる蟻や蜘蛛や小さな昆虫などもよ

く知られているが、地獄の落とし穴を仕掛ける張本人の播鉢山の正体はあまり知られていない。歳時記などによれば、播鉢虫は、あの美しいうすばかげろうの幼虫で、八一九耗の後退して歩くのを特徴とする虫で、姿も声もたてず、恐るべき巧妙なトリックを仕掛け、待つことに徹して、万が一にもチャンスを逃すことはない。

蟻地獄砂の切れ味あざやかに

青畝

蟻地獄病者の影をもて蔽ふ

波郷

蟻地獄女の髪の掌に剩り

桂郎

六十本深紅の薔薇を贈りけり

林 いづみ

六十本の深紅の薔薇は、還暦を迎えられた友人への贈りものである。人生齢六十、山あり、河あり一年毎に誕生日もあるが、ことに還暦は干支が六十年経って一回りして元にかえる大きな節目である。或る意味では新たな出発点である。六十本の深紅の薔薇は、過ごして来た人生の苦楽を顧みる思いもあるが、それは同時にこれから進むべき道への力であり、智慧であり、責任でもある。薔薇はその友人のみに与えられた輝かしい未来への祝福の一本一本の六十本である。

ちなみに、私はこの薔薇を贈られた方を存じ上げていないが、一九五二年、昭和二十七年の生まれであつたら辰年である。

(以下略)

風土集



神蔵器選

掌の珠を割るごと朴開く 東京 柿沼 盟子

えご散りて木の下道の闇深く

団欒の苺ミルクや匙の数

青梅雨や地をゆく鳩の赤き足

はや支柱長きに替ふるトマト苗

藁の香の清し夏越の祓かな

山の墓 矢車草を目印に

雲を食ふやうな心地で海月食ふ

さらさらと心の中の蟻地獄

立葵四五本もある庫裏の前

白秋の海へ滴る梅雨の月

出島より近代医学雲の峰

降りつづく雨の甲斐路のかたつむり

母看取る離れの竹や皮を脱ぐ

西教寺の総門くぐる白日傘

京都

杉本葉土子

平塚

中沢 三省

早苗田や水より明くる峡の村 津山 生田 作

走り梅雨妻の忘れし鎌拾ふ

梅雨寒の厨に秤るパンの粉

うつらうつら人語遠のく木下闇

新緑の中にひときは朴一樹

半夏生 李朝白瓷の轆轤跡

索道の眼下に綻ぶ朴の花

巻藁に矢音重たき梅雨入かな

栗の花幽体離脱の匂ひ立つ

メロンパン窯より出でぬ栗の花

晶子忌の心の沖を人過ぎる

山なべてたてがみのあり青嵐

文人は鎌倉が好き傘雨の忌

抱く夢は一つにあらざ朱き夏

閻魔の日心計りて謀られし

相模原

岡本尚子

相模原

天野みゆき